

乾乳期の飼養管理について

近年、乳牛の泌乳能力の向上に伴い繁殖成績が悪化する傾向にあります。原因の1つとして分娩後のエネルギー不足によるストレスが挙げられます。乳牛が給与されている飼料を十分に利用できていない例が多いようです。乾乳期の飼養管理は分娩後の乾物摂取量や配合飼料の利用に大きく影響します。飛び出し乳量が高い、周産期病の発生が多いという農家は乾乳期の管理を見直してみましよう。



1 乾乳期の意味

- (1) 乳腺の再生：乾乳期間の確保
- (2) 分娩後の高泌乳に向けたルーメンの準備：乾物摂取量の確保、配合飼料の給与による絨毛の発達
- (3) 乳房炎の乾乳期治療
- (4) 胎児への栄養供給と初乳成分の向上

2 乾乳期間中の管理のポイント

- (1) 牛群を分けて盗食に注意し、設計したとおりの飼料給与ができるように管理する。
- (2) ボディコンディションに注意し、オーバーコンディションにならないように管理する。
- (3) ビタミン剤を給与し、特にA、Eが不足しないよう留意する。
- (4) 粗飼料の品質に注意し、給与回数を工夫するなどして乾物摂取量の落ち込みを抑える。

3 乾乳前期（乾乳直後～分娩前3週間まで）の管理のポイント

- (1) 給与飼料の80～85%を粗飼料とし、ルーメン機能・容積の回復を図る。
- (2) この時期の配合飼料は第一胃の絨毛の退縮を最小限にするために給与し、1～2kgとする。
※この時期の高エネルギー飼料の給与が周産期病発生の原因になっているとの報告がある
- (3) 乾物摂取量を落とさないように、体重の1.5～2%を確保する。
- (4) カルシウムを必要量給与し、泌乳後期の給与中止に備える。

4 乾乳後期（分娩前3週間～分娩まで）の管理のポイント

- (1) 乾乳前で過肥になっていても、無理に乾乳期で配合飼料の給与量を落さない。
- (2) 初産牛は2kg、経産牛は3～4kgを上限に徐々に増給しながら配合飼料を給与する。
- (3) 絨毛を発達させるため、1日あたりの配合飼料の給与量が2kgを超えたら1回当りの給与量は1.5～2kg程度とする。
- (4) カルシウムの給与をやめて、粗飼料もできるだけカリウム濃度の低いものを給与する。

5 蛋白質の給与

乾乳期は胎児の急激な成長に伴い蛋白質の必要量も高くなります。特に乾乳前期に蛋白質が不足すると胎盤が過剰に発達してしまい、後期に配合飼料を増給した時に胎児が吸収するエネルギーが大きくなってしまい、難産や後産停滞などを引き起こす可能性があります。乾乳期の飼料設計の際、過不足なく蛋白質が給与できるよう留意しましょう。

6 乾乳前の管理

分娩後の種付けが上手くいかず泌乳期間が延長して、過肥になってしまった牛は乾乳期の管理も難しくなります。乾乳予定日を目標に配合飼料の給与量を減らして適切なボディコンディションを維持するようコントロールしてください。